山の神遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1975

伊那市教育委員会
伊那市水道局

序

今度，山の神遺跡緊急発掘調査の報告書が刊行されることは，誠に喜びに堪えません。伊那市内の竜西地区（特に小黒川以北，小沢川以南の範囲）には本文でも述べたように26か所の遺跡が存在し，その時代もまちまちで，古く約一万年位前から500～600年位前の各時代にわたる先住民の遺構や遺物が確認されています。

この調査は宮田村南割在住日本考古学協会会員，友野良一先生を団長とし，さらに，地元のすぐれた方々で調査団を編成しました。梅雨期のうっとうしい日の下，献身的なご努力によって成果をあげることができましたことは誠に感慨無量なものがあります。また発掘に全面的な協力をしてくださった水道局職員一同，作業員の皆様に円滑に調査を進めることができたことについて心からお礼申しあげます。

調査報告書が出版されるに当り，発掘調査に御協力いただいた関係各位に重ねて深甚な感謝の意を申しあげます。

昭和50年7月28日

伊那市教育委員会

教育長　松　沢　一　美

はしがき

小黒原台地は広大な畑作中心の農地であり、農振地域と西部開発伊那土地改良区の両対象区ともなっている。

このたび県勤労者福祉センターの建設にあたり、水の供給を依頼されたので、配水池を造ることになった。ところが、たまたまその敷地が山の神遺跡のため早速着工することが出来ず、文化財保護法に基づく発掘調査の手続きを進めることになった。

伊那市教育委員会にお願いしたところ格別なご配慮で緊急発掘をおこなっていただいた。恰も梅雨期でかつ何かと多忙のところ、万難を廃しここに調査が完了し、報告できる段階になり感謝に絶えず関係者各位に御礼申し上げます。

昭和50年7月28日

伊那市水道局長　重盛儀治

凡　　例

1．本調査は，水道配水池及び水道管布設工事にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。

2．この調査は，水道配水池及び水道管附設工事に伴う，緊急発掘調査で，事業は伊那市水道局の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3．本調査は，昭和50年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略とし，資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し，その責任を明らかにした。

小池政美

o 図版作製者

・遺構及び地形測量　　小池政美

o 写真撮影

・発掘及び遺構　　小池政美

5．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　例
目　次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章　遺跡の環境 …… (1～4)

第1節　位　　置 …… (1)
第2節　地形・地質 …… (1)
第3節　歴史的環境 …… (2～4)

第Ⅱ章　調査の経過 …… (5～7)

第1節　保護措置の経過 …… (5)
第2節　発掘調査の経過 …… (6～7)

第Ⅲ章　遺構・遺物 …… (8～9)

第1節　遺　　構 …… (8)
第2節　遺　　物 …… (8)

第Ⅳ章　所　　見 …… (10)

挿 図 目 次

第１図　小黒原台地周辺遺跡分布図 ---------- （　3　）
第２図　遺構配置図 ---------- （　8　）
第３図　第１号土拡実測図 ---------- （　9　）

表　　目 次

第１表　小黒原台地周辺遺跡一覧表 ---------- （　4　）

図 版 目 次

図版１　遺跡の遠景
図版２　遺構及びグリット全景

第Ⅰ章　遺跡の環境

第１節　位　置

遺跡は，伊那市大字伊那6423番地に所在している。遺跡のある台地は通称，小黒原と呼ばれ，戦前は昼なお暗き，森林地帯であったが，戦後，食糧事情にともない，農耕隊の手によって，開拓がなされたところでもある。

昭和48年度，中央道遺跡発掘調査の際に，当遺跡より北西へ約１㎞程離れた城楽遺跡より農耕隊が使用したと推定できる遺構が３か所発見されている。（註１）

地形的に概観してみると，木曾山脈の将棋頭より流れ出す小黒川と，南沢山より流れ出す小沢川とで形成された河成段丘上にある。遺跡地までの道順は国鉄飯田線伊那市駅で降り，西へ200ｍ位行った所を左に曲がり，西駒ケ岳線を西へと１㎞程さかのぼっていくと遺跡地に到着する。遺跡地に到着するまでには目印となる公私の建物がいくつもある。これを記してみると，上伊那合同庁舎，荒井神社，旧保健所，伊那職業訓練所，弥生ケ丘高等学校，伊那中学校，春日神社，先明様などである。

第２節　地形．地質

山の神遺跡の所在する字小黒原は南は小黒川，北は小沢川によって南北に区切られた台地で，全般的に微地形の変化は乏しい。台地に登れば眼下が大きく開け，西方には南沢，鳩吹，将棋頭が，東側に目を転じれば，仙丈ケ岳，北岳，東駒ケ岳に代表される南アルプスが眺望できる。また，第１節の位置で述べた様に戦後まで一面の森林地帯であった。

土層はまず最上層に有機質（ヒューマス）を含む黒色土があり，その下に厚くローム層が堆積している。この地のローム層は，第四紀の波田ローム層であり，その成因は御岳や乗鞍岳の墳火によるものと考えられている。

最後に，小黒原台地に最も関係の深い，小沢川と小黒川について，詳細な説明を加えておくことにする。小沢川は権兵衛峠を中にはさんだ南沢と北沢から流れ出るが，伊那市平沢の芝原で合流し，途中小沢で西天竜と合わさって伊那市内を流れ天竜川に達する。全長11㎞，南沢には南沢鉱泉がある。上流は崩壊個所が多く，洪水の場合土砂や礫が一時的に多く流出

する。小黒川は将棋頭の標高2727 m付近から発し，西春近と伊那市の境界を流れて天竜川に注ぐ，その間約11.5km，公配が急で上流部には岩層が多く，急流で他の河川に比して洪水時も土砂の流出が少ない。内萱発電所があり水力発電に利用されている。（註２）

第３節　歴史的環境

小沢川と小黒川とに狭まれた範囲内には，現在までにわかっている埋蔵文化財包蔵地は26カ所存在している。遺跡の分布位置を概観してみると，自然的条件によって次の３つに分類が可能と思われる。一つは山麓線扇状地の扇頂部や扇測部に続く遺跡群，一つは扇状地の扇端部と段丘面の遺跡群，一つは天竜川の支流である小黒川や小沢川沿いに細長く続く遺跡群である。分布図に記載されている26遺跡の内訳は，旧石器を出すもの２，縄文早期２，縄文前期５，縄文中期20，縄文後期２，縄文晩期１，弥生中期１，弥生後期１，古墳３，奈良・平安時代の土師器を出すもの７，奈良・平安時代の土師器を出すもの７，奈良・平安時代の須恵器を出すもの９，灰釉陶器を出すもの９，中世の陶磁器を出すもの６である。

現在までに調査された遺跡は，18の伊勢並（註３），19の八人塚古墳（註４），26の上の山（註５），15の赤坂，16のますみが丘，17の城楽（註６），20の狐塚南古墳（註７）である。伊勢並遺跡は昭和38年に発掘調査が行なわれ，縄文中期の住居址が検出された。そのほかに，縄文早期の土器片も多量に発見されている。早期の土器片のなかには東海，美濃地方のものが含まれており，文化交流という点で，大きな問題を投げかけてくれた。

八人塚古墳は昭和16年に塩原伝氏によって調査され，次のような成果が収められた。長さ６m，巾1.2m，高さ1.2mの横穴式石室を有する円墳，遺物としては，太刀２，刀子３，鉄鏃槍３，管玉２，小玉２，和鏡１を出土している。さらに，築造年代を８世紀末頃と考察を加えている。

上の山遺跡は弥生ケ丘高等学校の東側，段丘先端部に位置し，同校のテニスコート用地造成の折に発見された遺跡である。同校教諭堀口貞幸氏によって調査され，土師器，灰釉陶器を一諸に出す，平安時代の住居址が４軒発見された。

赤坂，ますみが丘，城楽の各遺跡は昭和48年度，中央道発掘調査の際に，その一部分が明らかとなった。赤坂遺跡では土坑４，ますみが丘遺跡では溝状址１，原田井旧井址，溝状址３，竪穴址３であった。狐塚南古墳は昭和50年4月～５月にかけて実施され，上伊那では唯一の杏葉が３個出土している。　（小池政美）

註１　長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　（伊那市内その２）昭和48年度

２　上伊那誌　（自然篇，第三編陸水）

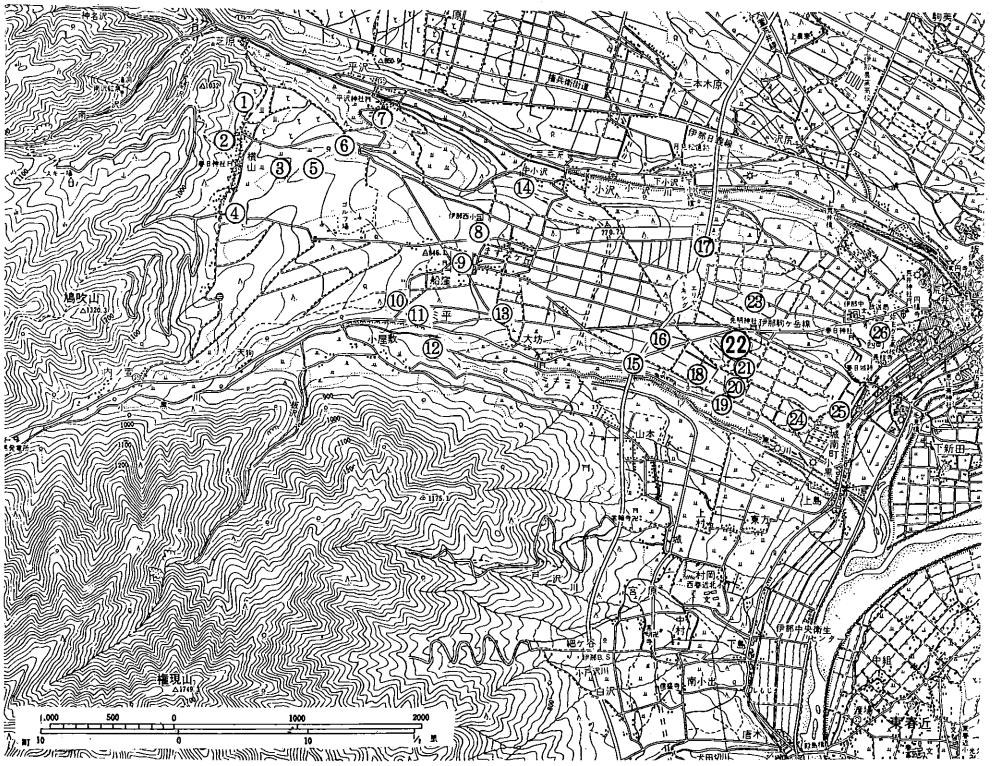
３　上伊那誌　（歴史篇）

４　塩原　伝　（信濃伊那町八人塚）　考古学雑誌八の９

５　堀口貞幸　（信濃考古６）

６　註１と同じ

７　本年度春調査されたが，報告書は未刊



第１図　小黒原台地周辺遺跡分布図

遺跡の名称

１北方　２矢塚畑　３関畑　４八人塚　５おぐし沢　６丸山清水　７穴沢　８ますみケ丘上　９船窪　10ねずみ平２　11ねずみ平１　12上手原　13城畑　14小沢原　15赤坂　16ますみケ丘　17城楽　18伊勢並　19八人塚古墳　20狐塚南古墳　21狐塚北古墳　**22山の神**　23富士塚　24小黒南原　25ウグイス原団地　26上の山

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代			古墳		奈良平安			中世
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	土	須	灰	陶磁
1	北方	横山					○											
2	矢塚原	〃					○											
3	関畑	〃					○											
4	八人塚	〃					○											
5	おぐし沢	〃					○											
6	丸山清水	平沢					○											
7	穴沢	〃					○											
8	ますみが丘上	ますみが丘					○									○	○	○
9	船窪	〃				○	○									○	○	○
10	ねずみ平2	〃					○								○	○	○	
11	ねずみ平1	〃	○				○		○			○						
12	上手原	〃					○											
13	城畑	大坊				○	○								○	○	○	○
14	小沢原	小沢					○											
15	赤坂	小黒原					○											
16	ますみが丘	〃					○											
17	城楽	〃				○	○	○							○	○	○	○
18	伊勢並	〃	○		○	○	○	○			○			○	○	○	○	
19	八人塚古墳	〃																
20	狐塚南古墳	〃																
21	狐塚北古墳	〃																
22	山の神	〃			○	○	○								○	○	○	○
23	富土塚	〃																○
24	小黒南原	〃					○											
25	ウグイス原団地	城南町													○	○	○	
26	山の上	荒井													○	○	○	

第１表　小黒原台地周辺遺跡一覧表

第Ⅱ章　調査の経過

第1節　保護措置の経過

山の神遺跡は伊那市勤労者福祉センター建設に伴なって，飲料水の確保が問題視されてきた。そこで，水不足を補充するために，水道局では伊那市西町区城南町より小黒原地籍までポンプアンプをし，さらに，それを落下させる方法をとり入れた。前述した区域内には遺跡分布図によると，山の神遺跡が含まれていたので，伊那市教育委員会と水道局との間で検討がなされ，工事着工以前に学術調査を行ない記録保存をすることになりました。

5月22日　水道局業務課長（伊藤），耕地林務課（黒河内），教育委員会（小池）の三者で現地踏査を行なう。業務課長と社会教育課長（竹松）との間で，費用や日程について意見交換を実施する。

6月19日　文化庁長官宛で緊急発掘調査届と発掘承諾書を提出する。

山の神遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長	
〃	向山雅重	長野県文化財専問委員	
〃	木下　衛	上伊那教育会会長	
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員	
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会社会教育課長	
〃	石倉俊彦	〃	課長補佐
〃	小池政美	〃	主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃

調　査　員	辰野伝衛	長野県考古学会会員
〃	福沢幸一	〃
〃	小池政美	〃

第２節　発掘調査の経過

昭和50年7月3日 当初では6月25日より開始の予定でいたが，各種の都合があって，本日より開始する運びとなってしまった。現地踏査の時に知り得たことであるが，木が立ち，茅がうっそうと茂っていたので，まず，それらの刈り取りから手をつけることにした。立木のなかには，桃の木や桜の木があり，桃が青々と，さくらんぼが赤々と夏の日ざしにまぶしく輝やいていた。暑い日が予想されるから，日よけの為にできるだけ立木を残すようにこころがけた。

昭和50年7月7日 本日より実質的な発掘調査を始めた。まず発掘調査に必要なグリットを設定した。その名称は北から南へ１～14，西から東へＡ～Ｅとし，一辺２m×２m，面積4m^2のものを70個設定，原則として千鳥状に掘り，遺構の発見の状態によって拡張するようにした。グリット設定が完了した後に，テントを宮田より運搬してきて，当地区内の東寄りの位置に張った。

午後よりグリット掘りに着手する。グリット掘りは基盤の傾斜が南より北にかけてあるので，土の運搬を考えて，北より南へむけてあけていくことにした。

10グリット掘り下げてみるが，遺構と遺物の検出は全く無くて，わずかに炭化物の検出がみられたの

発掘風景

にすぎなかった。ローム層までは30㎝位であった。

昭和50年7月8日 昨日は全く不運な一日であった。本日こそは何か発見しようと朝から精を出して作業にとりかかった。本日も，掘れども，掘れども何も出ずという一言につきた。西側の境界の近くに南北に走る溝状の黒い落ち込みがみられたときにはみんな感嘆していたが，精査を重ねてみると後世の攪乱と判明し，落胆してしまった。本日もまた何も出ずに，一日が暮れてしまった。作業員達に何も出土しなくても遺跡の範囲を確認するうえで，大事なことを説きあかしたが，胸中では何か出て欲しいものだと念じられずにはおられなかった。

昭和50年7月9日 本日は一種のあきらめの境地で仕事にとりかかった。中央より西側を南の道路敷附近まで，グリットを掘り進めていった。この時点では何の変化もみられず，期待はあと東側だけによせられてしまった。このように気乗りしない状態で，南東の道路敷の隅のグリットを掘り下げていくと，黒々と落ち込みがみられ，また，攪乱の形跡もなかった数日間，追い続けてきた初めての遺構検出の瞬間であった。これを第1号土坑と命名し，拡張にとりかかる。いままでと違って，仕事に張り合いが出てきた。

午後，掘り下げを開始したが，なかから炭化物が多量に検出されたが，遺物は何も出土しなかった。

昭和50年7月14日 本日は昨日まで降り続いた雨の為に，遺跡地の土は湿気が多く，ベトつきかげんであった。仕事を始めた当初は小雨がパラついていた。第1号土坑の完掘を実施するとともに，発掘未地区に手をつける。

昭和50年7月16日 本日をもって，山の神遺跡の発掘を終了する。午前中は第1号土坑の完掘，写真撮影，第1号土坑の実測，全測図の作製，発掘器材の洗浄，器材の員数点検，午後，テントこわし，器材の運搬

（小池政美）

作業員名簿

北原一喜　辰野みさ子　溝上美弥子　唐木馨　唐木淳　有賀美咲

第Ⅲ章　遺構・遺物

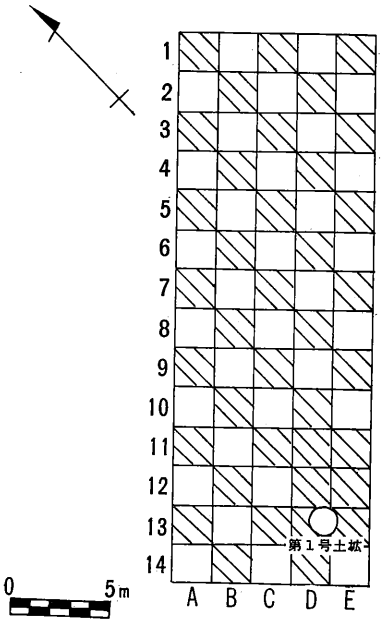
第1節　遺　構

第1号土坑　（第3図，図版2）

本土坑はD13，E13の二つのグリッドにまたがって発見された。表土面から－40㎝位下ったソフトローム層を掘り込み，南北1ｍ10㎝，東西1ｍ40㎝程の規模で，辺が幾分角張ってはいるが全般的には円形を呈している。壁高は東で70㎝，西50㎝，北で50㎝，南で30㎝をそれぞれ測定できる。状態は全般的に内弯性が強く，東側と北側には途中に中段があり，それは東側の方が極めて顕著であった。

壁面の下部はハードローム層に達しており，その硬度は著じるしかった。床面はハードローム層のために，かんかんするほど堅くなっており，構築当時はおそらく人為的な叩きは施されなかったと思われる。ただ，水平にしようとする人為的な工作は存在したものと思われる。床面の中央部に直径10㎝，深さ14㎝位のピットが一か所穿されているが，これは何を意味しているかは現在の段階では不明である。

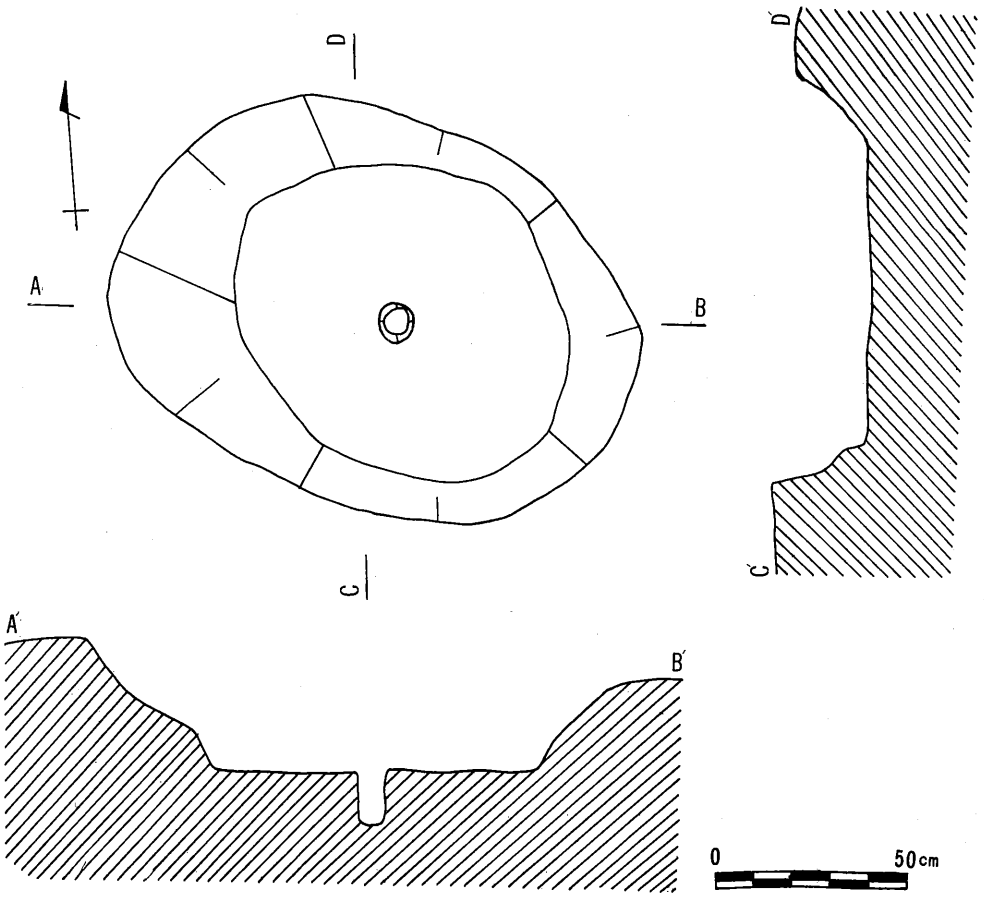
覆土中より多量の炭化物は検出されたが，遺物は何も出土しなかった。これにより，本土坑は何時代に属するかは判然としない。



第2図　遺構配置図

第2節　遺　物

遺物として土器片が3片出土しただけで，石器類の出土は全くなかった。これらの土器片は本来ならば，本報告書に記載すべきであるが，極めて細片であり，かつまた無文であるために割愛させていただきました。土器片は色調，胎土，厚さ等の諸項目より，加曾利E式に含まれることは確実であると思われるが，その中をさらに分類するのは無文であるために不可能に近いように思われる。（小池政美）



第３図　第１土坑実測図

第Ⅳ章　所　　見

水道タンク及び水道管附設工事が着工されるのに直面して，当用地内に埋蔵する山の神遺跡の緊急発掘調査が行なわれ，当初，期待していたほどの成果を収めずに終了してしまった。しかし，遺跡の包蔵範囲を確認するうえでは有意義な調査であったことを強調しておきたい。

まず，最初本遺跡の立地と範囲について

広大な小黒原台地の東端に近い場所，そのなかでも，本発掘地点は小黒川より500 m程，北へ寄った位置である。発掘地点の微地形は南側と北側はかなり深い凹地になっており，双方にはさまれた所は丘状を呈している。特に，北側のそれは，明らかに水の流れがあったものとみえて，砂利層の堆積が厚く，幾層にもなっているのが判明した。本遺跡をとりまく遺跡の時代，内容については，第Ⅰ章，第3節，歴史的環境に触れてあるので，本章では省くことにする。

山の神遺跡の遺構と遺物

第1号土坑は形状が南北1 m 10 cm，東西1 m 40 cm程を示し，覆土内より炭化物の検出によって，遺構への確信を強くしたが，遺物が出土しないために時代決定は不可能であった。

遺物に関しては縄文中期後半の加曾利E式土器片が3片出土したが，無文であるために，加曾利E式に於ける細かな編年まで決めつけるには不充分であった。

発掘に当っては水道局長，業務課長をはじめ，水道局職員一同，その外，遠路はるばる西春近より来ていただいた作業員の皆様に厚く感謝する次第であります。

最後に，実質的な成果はあまり収めることはなかったが，今後，何かの参考に役立てば幸甚である。

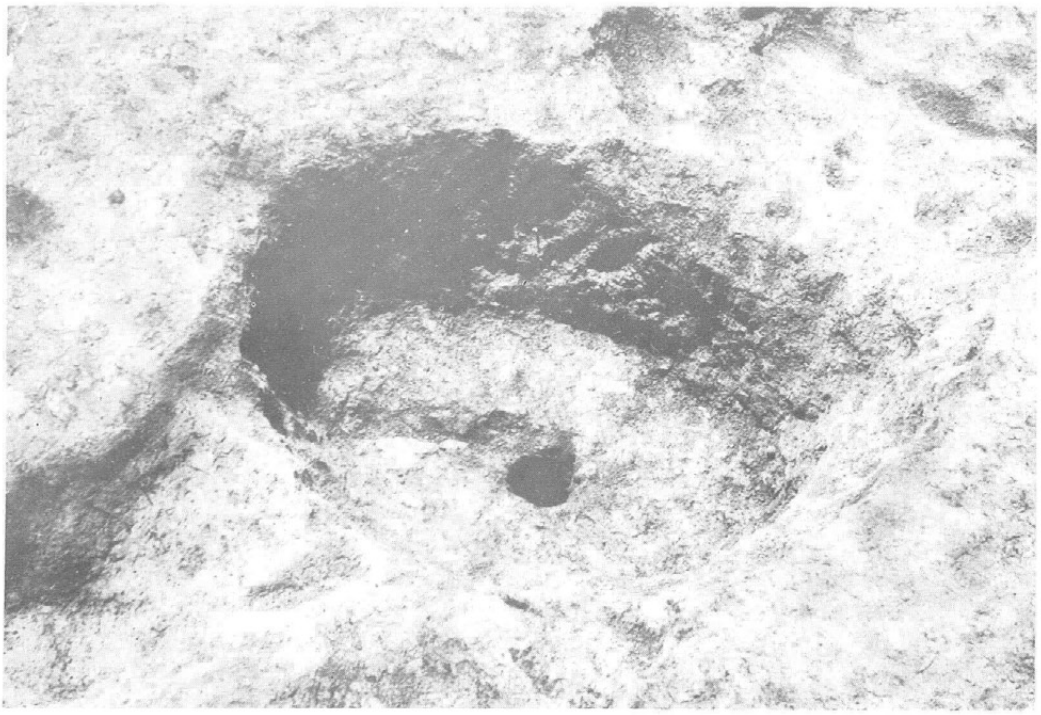
（小池政美）

図版1　遺跡の全景

遺跡地を東側より眺む

遺跡地を西側より眺む

図版2　遺構及びグリット全景



第 1 号土坑

グリット全景（南より）

山の神遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和50年8月20日　印刷
昭和50年8月25日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会
印刷所　長野県伊那市美すず上大島
みすず創美社